

の奇妙な結合物のようなこの領域について疑問はもちつつも、極めて魅力的であることは否定できない。心理現象というものは、何らかのモデルを通じてしか認識できない、という前提に立つとき、従来の“定量的”モデルが極めて貧しいものであることは認めざるを得ないであろう。すると、認知科学の“syntactic”なモデルは、

豊かな可能性をもつものに見えてくる。話は飛躍するようだが、質問紙法による調査等も認知科学のようなモデルを通じて全く異なった観点から見るのが可能になるのではないか、という気がしてくるのである。私自身は、いくらか距離をおきつつ、認知科学の今後をながめていきたいと考えている。

研究経過報告

池田博和

1.) 昨年度に文部省科学研究費の助成をうけた「名大式ロールシャッハ技法における「思考—言語カテゴリーの再構成」に関する研究は、村上英治教授、土川隆史講師その他の共同研究者とともに着実にすすめられ、その中間報告は今年の東海心理学会第29回大会において、「名大式—、現時点における総括」と題して報告された。

2.) 大橋正夫、久世敏雄両教授ほかの編集になる「入門心理学」(福村出版、1980)には、「パーソナリティの査定」の節を執筆させていただいた。

3.) 教育学部のいわゆる「教育60年代研究」に関連しては、筆者のかねてからの懸案であったところの自閉症論を、「自然さの喪失—人間学的自閉症論からみた現代の教育観—」と題してまとめることができた(「教育60年代研究 第一巻 現代の児童観と教育」福村出版 近刊)。

4.) 田畑 治助教授ほかの共同研究者との臨床青年心理研究会に関する成果は、本紀要に間宮正幸君他との共著により「臨床青年心理学研究(VI)—7年間にわたった登校拒否を克服した青年—」と題して報告された。同じ仲間によってすすめられてきた「登校拒否の家族研究」のまとめは、今年の紀要に間にあわすことができなかったが、今後もおこの線に沿って一層の検討を重ねていきたいと考えている。

5.) 昨年度は、10月に「心理臨床家の集い」が、また1月初旬には「全国学生相談研究会」が当名古屋大学で開かれ、これら全国的規模の集まりをあいついでお世話することのお手伝いのできたのは幸いであった。また、この7月下旬には、箱根でおこなわれた「学生相談関係教官エンカウンター・グループ」に参加でき、グループ経験を深めることができたのも貴重な体験となった。

研究状況報告

鹿内啓子

1 帰属作用に関する研究

これまで帰属作用の個人差の問題に関心をもち、とくにself-esteemを取り上げて、それが帰属にどのような影響を及ぼすかを検討してきた。昨年は、self-esteemが他者の成功・失敗の帰属に対してどのように影響するかを検討したが、それらの研究結果を、現在まとめ終えた段階にある。

これらの研究を通して一応の知見は得られたが、より重要なのは、self-esteemの違いによって生じた、自己あるいは他者の達成結果に関する帰属の差異が、その後の行動にどのような影響を及ぼすのか、という問題である。近年、教育場面において、学業不振や無力感を帰属作用によって説明し、さらに治療しようとする研究の流れがある。そこで昨年度末に、大学生を被験者として、失敗についての帰属が達成行動への固執性とどのような

関係をもつかに関する実験を行なった。しかしこの実験は残念ながらうまくいかず、現在適切な実験計画をたてるべく、検討中である。

2 対人関係の発達に関する研究

大橋正夫教授他7名からなる社会心理学研究会の共同研究として行なわれたものである。相互に未知の者によって構成された集団の中で、対人感情や対人認知がどのように変化・発達して、集団が構成化されていくのかを検討することを目的として、本学部附属中学校1年生の2学級を対象に、昨年度の1学期と2学期の長期にわたり、継続的に調査を実施した。

昨年度末から今年度にかけて、多量のデータの処理に手間取りながらも、基本的な問題についてある程度分析を行なった。これについては、第44回日本心理学会大会で発表する予定である。